

# 魔法使いの姪

fujicoco3

学生が二人、夕焼けで赤く染まった帰り道。

「え？何て言ったの？今」

まるで普通のことのように、何でもない事のように薫が言うから、私は聞き流せなかった。

冗談は冗談らしく、もっと大げさに言ってほしい。

なのに、薫はさっきと同じように、（まるで今日の夕飯の献立は何だろうね、って言うような口調で）繰り返す。

「私、夏休みになったら引っ越すんだ」

「おかえり、アカリ」

家に帰っても、ご飯を食べる気にもならず、部屋へ駆け上った。

なのに、部屋の前には可愛らしい女の子が一人。

可愛らしい外見に不釣り合いな、胸元が見えそうなタンクトップと、すらりと長い手足が見える短パン。

私の部屋の扉に背中を預けて、あぐらをかいて座ってる。

彼女は私の親戚。

「……今、話したくないんだけど」

「あら……そんな可愛くない口をきくのはどの口かしら」

「いた、いた、いたってばっ」

立ち上がると手を伸ばして私の頬をぎゅっつつねる。

私が大声を上げようとする、その前にさっと手をひっこめて。

「年上には敬意をはらうものでしょう？」

その子はとっても可愛い笑顔を見せる。

とっても可愛い、でも、とっても怖い……。

「さあ、どうして暗い顔をしたのか、教えてちょうだい」

「あらまあ、そんな事」

「そんな事って言わないでよ」

私はベッドに顔をうずめる。

制服がしわになるかもしれないけど、着替える気にもならない。

そういう点、お母さんと違ってあの子は何も言わない。

さっきの事を話してる間も話し終わった後も、私が寝ている隣に腰掛けて、私のことを見ている

。

「どうしてそんなにショックなの？」

「……………」

「水晶玉の予言で見たとおりでしょう？」

私は確かに知っていた。

薫が引っ越すこと、転校すること。

「私が悲しかったのは、転校じゃなくて」

涙と一緒にあってじわりじわりと沸いてくるのは、何だろう。

「薫が何でもない事みたいに、言っちゃうからだよ」

ぽとぽと、シーツに染みができる。

お母さんなら絶対、ティッシュで拭きなさいって言うんだけど。

この子は違う。

ただ、私が泣いている間中、そばに居るだけ。

でも何だか安心できて、私はそれだけでよかった。

「メールしてよね。電話も」

「うん、絶対。アカリも遊びにおいでよ」

「うん...約束」

薫の目には、涙がいっぱい溜まってる。

私も色々言いたかったけど、言葉にできなくて。

話したら泣いてしまいそうで。

薫のお母さんが、出発するよって言うまで、二人でうなずき合ってた。

ありがとう。

ありがとう。

元気でね。

またね。

私たち親友だよね。

引越しのトラックが角を曲がって見えなくなっていく。

私は振っていた手をゆっくりと下ろした。

もう、今までみたいに会うことはないだろうけど。

今までみたいな友達では居られないだろうけど。

「良かったの？」

振り向くと、電柱の影からあの子がひょっこり顔を出す。

今日は向日葵みたいな黄色のワンピース。麦藁帽子。

流行なんて完璧に無視したその姿も、可愛かったらサマになるんだから美少女って得だ。

「何が？」

「私だったら、何とかしてあげられたのに」

じっと私を見つめるその顔に、私は思わず笑顔になる。

「叔母さんって、過保護だよ」

出会いも分かれも、これから先もたくさんある。

乗り越えていくのも、大人になるってことだから。

青い青い空の下、偉大な魔女とその姪は手をつないで帰っていく。